

教材研究ノート

18 世紀英国文化「謎解き」の旅
(イエール大学から宮城学院女子大学へ)
—肖像画《ヒル夫妻》をめぐる—

吉村典子

はじめに

1. 《ヒル夫妻》に描かれたもの
 - 1-1. 描かれた道具：茶道具として
 - 1-2. 描かれた道具：手芸道具として
 - 1-3. 描かれた手芸：ノティングもしくはタティングとして
2. 《ヒル夫妻》にみる 18 世紀英国文化
 - 2-1. 日常性
 - 2-2. インテリア
 - 2-3. 服飾と人物の所作

おわりに

はじめに

2023 年夏、イエール大学・招聘研究員として、北米最大の英国美術コレクションを有する同大学の英国美術研究所 (Yale Center for British Art : 以下 YCBA と表記) に属し、調査・研究・公開講演等に約 3 か月間従事することができた。研究課題は、戦後を中心とした 20 世紀英国美術であるが、本学英文学科文化系の授業で扱う 16 世紀～19 世紀の美術資料も YCBA には潤沢にあり、教材研究も折に触れて進めることにした。前者については別稿で論じることにし、本稿では後者の中から 18 世紀美術について報告したい。本学英文学科生が、イエール大学で「謎」となっていたことの解明に重要な役割を果たしてくれたからである。

その切っ掛けとなった作品は、YCBA 所蔵の英国 18 世紀の肖像画《ヒル夫妻》(図 1) である。この絵画上には人物のほか、服飾、インテリア、



図1 アーサー・デヴィス作《ヒル夫妻》, 1750–51年頃, 油彩,
76.2×63.5 cm
所蔵: Yale Center for British Art, Paul Mellon Collection.

嗜好品等が描かれているため、当時の風俗や生活文化を読み取ることが
できる第一次資料として、本学の授業でたびたび取り上げてきた。これまで
は、美術書等の掲載図版を通して学生に紹介してきたが、このたびの
YCBA での在外研究により、実見が可能になった。すると、美術書等の図
版では視認することはなかった1本の糸が、夫人の右手から左手にかけて
描かれていることが見えてきたのである(図2)。この糸は何か。糸の延
長線上にある右手にもつ道具は何か。

帰国後、本学の授業で、拡大写真を見せながら、実見の経過と、絵の中
で夫人がする手芸等については調査中であることを報告すると、受講生の
一人が「タティングではないか」、「自分は幼い時にしたことがある」と申



図2 図1の部分

夫人の右手と左手の間に白い糸が見える。

テーブルの上は、カップ&ソーサーと揃いの柄の茶零し（右奥）、砂糖入れ（左奥）、中央のティーポットの向こうに銀製のクリームジャグとその隣にあるのは、恐らくスプーントレイ。

し出てくれたのである。この情報が切っ掛けとなり、さらに調べていくと18世紀の貴族文化としてのそれが見えてきた。YCSAでの「謎」が、宮城学院女子大学で解き明かされるまでの「旅」を報告し、本作を通して改めて18世紀の英国文化をここに示してみたい。

1. 《ヒル夫妻》に描かれたもの

1-1. 描かれた道具：茶道具として

1750-1751頃に制作された《ヒル夫妻》は、英国のトーリー党の法廷弁護士（George Hill, 1716-1808）と妻（Ann Barbara Hill nee Medlycott, 1720-c.1800）を描いたアーサー・デヴィス（Arthur Devis, 1712-1787）による肖像画である。

英国における肖像画は、チューダー朝（1408-1603）の時代に王侯貴族を対象に盛んに描かれるようになる。宗教改革や絶対王政が進むにつれて、宗教画から肖像画へと需要が変化したことも背景にあるであろう。王侯貴族の肖像画には正面性を強調した威厳に満ちた表現が多数見られるが、18世紀になると本作のように上流階級の日常のくつろいだ様子を描くスタイルが流行する。あたかも歓談時のような何気ない様子が描かれていること

からか、この種の肖像画は「カンヴァセーション・ピース」(conversation piece)と呼ばれている。日本では「団欒肖像画」と訳され(本稿でもこの語を使用する)、英国 18 世紀の絵画のスタイルの一つに位置付けられてきた。デヴィスは、300 点以上の団欒肖像画を制作したと言われており¹、1745 年には、自身のスタジオをロンドンに設立していることから、本作は肖像画家として確立し、名声を得た時代のものと言うことができる。

ヒル夫妻の夫ジョージの前掲の職業²からしても、所謂「ジェントリー」にあたり、社会的地位は高いものであるが、描かれている風俗からも上流階級の暮らしを思わせる。その一つが茶事である。夫人の横のテーブルの上には、7 客のティーカップとソーサーが並んでいる。茶は 17 世紀に中国茶が英国に運ばれると王侯貴族を中心に喫茶の習慣が浸透していく。やがて中産階級にも広がり、価格の低下や英国によるインドでの茶の栽培の開始等も手伝って、19 世紀には労働者階級へと普及するが、それまでは、茶は限られた範囲で享受される嗜好品であった。新大陸から運ばれるようになった砂糖も然りである。

茶事の亭主は女性であり(テーブル上の道具も夫人側に寄せられている)、砂糖の塊を砂糖挟みでゲストに給仕するのは茶事の見せ場であったと言う。そのためか、精巧に装飾された砂糖挟みが当時製造されていた(図 3)。そして、団欒肖像画《ヒル夫妻》の夫人の右手に持つ道具は、「砂糖挟み」であると伝えられ、本学の授業でも、それとして紹介してきた。

このたびの YCBA での在外研究は、この細部も確認できる絶好の機会であり、YCBA 職員の計らいで至近距離からの実見調査が可能となった。そして、夫人の手元を注視すると、確かに砂糖挟みのように、二股に分かれてはいたが、同時代の砂糖挟みに近似する形状ではない。また、砂糖を

¹ Angus Trumble, "Arthur Devis, 1712–1787, British, Mr. and Mrs. Hill". <https://collections.britishart.yale.edu/catalog/tms:101>

² 地主階級 (the gentry) の長男は土地を相続し、次男以下は法律家や聖職者、軍人等になることが多かった。貴族とともに、英国上流階級を構成した。

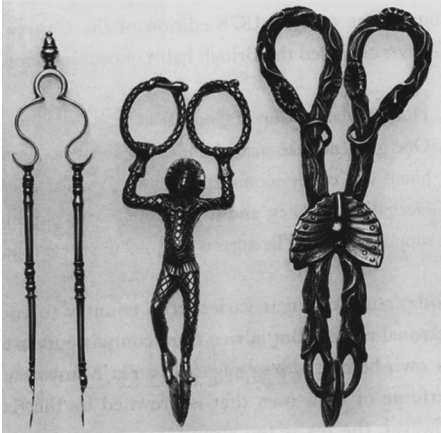


図3 砂糖挟み
左から 1726 年, 1798 年, 1730 年制作
出典: Jane Pettigrew, *Design for Tea*,
Sutton Publishing, 2004, p.113.

給仕する「見せ場」とすれば、5人のゲストは描かれていないことに改めて気づく。そしてなによりも実見により視認できた1本の糸から、その道具が砂糖挟みではなく、糸と関連する道具であることを確信したのであった。

1-2 描かれた道具：手芸道具として

ではこの道具は何か。より近づいてみると、二股に分かれたその間にくぼみがあり、糸を巻き付ける箇所のようにも見える。舟形に見える形状はシャトル（杼）を想起させる。しかし、シャトルと言えば、織物を作る際の機織用具の一つであり、経糸の開口した間を、緯糸を入れて左右に飛走する、また、それが飛びやすいように、左右先細の舟形になっているものである。類似するも、絵画には織機は描かれていない。さらに、ピンと張った糸が繋がる左手を見ると、その糸で輪奈をつくっている。膝の上で左右の手だけで行う手芸なのであろう。恐らく、太古の昔から漁師等が網を作る際に使われていた網針^{あぼり}のように、この道具で編上げていくものと考えられる。従って、織物ではなく編物のための道具と言うべきである。

YCBA 学芸員のランフィア氏 (Abigail Lamphier)、そして、筆者と同時

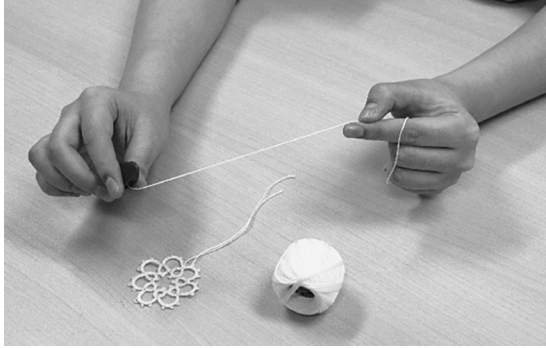


図4 タティングをする佐藤美紅さん
手前の花型は佐藤さん作で、10分程で作成できると言う。
(撮影：木川奈緒・英文学科副手)

期の招聘研究員で18世紀美術を専門とする英国ノッティンガム大学のチャン教授(Ting Chang)とともに作品を目視し、「糸」のように見える線は、表面の亀裂等によるものではなく、意識的に描かれた線であることを確認した。しかし、夫人が右手に持つ道具については解明できないまま、滞在期間は過ぎていった。

帰国して、本学学生たちに、「砂糖挟み」ではないことと、実見により新たに視認された線について説明し、夫人の持つ道具は何か、そして、どのような手芸を行っているかの解明は今後の課題であると伝え、受講生の一人佐藤美紅さん(当時英文学科2年)が「タティングではないか」と情報を提供してくれたのであった。聞けば、一部ではよく知られた手芸であると言う。早速、その言葉の響きから推測して“tattting”として英和辞典を引いてみると「糸をシャトルを使って編む、曲線模様を持つレース編み」とある。そして、近隣の手芸用品店に行くと、一定のスペースが「タティング」の為にとられており、複数の教本も並べられていた。日本においても確立している手芸の一つであることがわかる。早速、糸とシャトルを購入し、佐藤さんに制作を依頼すると、肖像画にあるような持ち方で、



図5 ジャン＝エティエンヌ・リオター
ル (1702-1789) によるマリー・
アントワネット (7歳頃) の肖像
画, 水彩, パステル等, 1762年,
32×25.5 cm

出典: "Jean-Etienne Liotard 24 Oct 2015-
31 Jan 2016 at the Royal Academy of Arts
in London," *MEER*, 23 Oct. 2015. ([https://
www.meer.com/en/17992-jean-etienne-
liotard](https://www.meer.com/en/17992-jean-etienne-liotard))

すいすいと編上げていく (図4)。

さらに、インターネット上を“18th century”, “portrait”, “tattooing”で検索すると、シャトルと糸をもつ、女性の肖像画が次から次へと出てくるのである。描かれている人物や風俗から、貴婦人の嗜みとしてのそれであることがわかる。なかにはマリー・アントワネット (Marie Antoinette, 1755-1793) がシャトルをもつ肖像画もある (図5)。こうした事例からも、18世紀肖像画の女性の典型的な持物と言っても過言ではないのである。

さらに、肖像画のシャトルに着目すると、装飾細工も描き込まれている。それ自体が工芸品と言えるほどである。実際、英国の美術工芸博物館収蔵品を調べてみると、必ずといってよいほどシャトルがそのリストに挙げられ、繊細な金工やエナメル彩が施された18世紀のシャトルも確認できる (図6)。

興味深いもう一つの点は、シャトルを持つ手と反対の手首に小袋が掛け

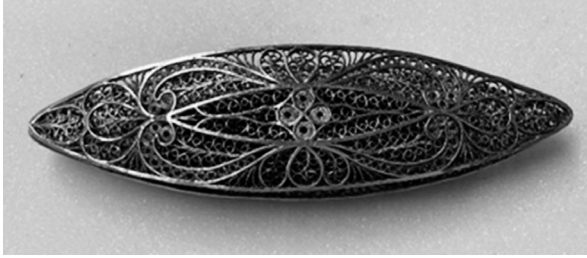


図6 銀のフィリグリー（線細工）のシャトル，1750-1799年，英国製，3×9.5×0.9 cm
所蔵：Victoria & Albert Museum, London

られている様子が殆どの作例に描かれていることである。多くが引き紐付きの小さなハンドバッグ状のものである。バッグがないと、糸玉が描かれている（図7）ことから、ハンドバッグはそれを入れるものであると考えられる。バッグから出ているように描かれている糸もある（図8）。

シャトルも入れて持ち歩いては、室内で、場合によっては庭で、余暇の楽しみとしてなされていたことも想像できる。当時、女性用の小型ハンドバッグは、レティキュール（reticule）と呼ばれていて、辞書には「引き紐がつき、刺繍やビーズ飾りのあるものが典型」とあるが、その中にはこうした糸や道具が入っていたとも考えられる。

描かれたバッグには、細やかな装飾が施されたものがあるが、なかにはドレスと揃いの素材と装飾のものも見られる³。これらは手芸のためのものであるにしても、前掲のシャトルのことを含めて考え合わせると、宝飾品に匹敵するような装身具としての役割も果たすものであったと思われる。また、こうした肖像画には、編まれたレースを描くものは多くは見られない。このことから、絵画上のそれは、技能を表すというよりは、貴

³ 次の作品には、胴着、ベティコート、レティキュールの布地が、揃い刺繍やアプリーケ装飾で描かれている（JeanMarc Nattier, *Marie-Adélaïde of France*, 1756, Oil on Canvas, 90×75 cm, Réunion des Musées Nationaux, Grand Palais, Versailles, France.）



図7 コワベル (Charles-Antoine Coypel, 1694-1752) 作, 夫婦像 (おそらくジュリエヌ夫妻), 1743年, パステル, 水彩, 100×80 cm

所蔵: The Metropolitan Museum of Art, N.Y., USA



図8 デクール (Michel Pierre Hubert Descours, 1741-1814) 作, エリザベス・ド・ラ・ヴァレ・ド・ラ・ロッシュの肖像, 1771年, 油彩, 80×63.7 cm

所蔵: The Bowes Museum, Durham, England

婦人としての嗜みやステイタスを示す意図であったと言すべきだろう。これらを描く絵画が多数確認できたことから、貴婦人の持物の典型であり、それは肖像画の定式の一つであったと位置づけられるのである。

1-3. 描かれた手芸：ノティングもしくはタティングとして

英文学科生の佐藤さんの話を、ランフィア学芸員、チャン教授に伝えると大変感激され、チャン教授は“tattng”を手掛かりに、この手芸に関する論文を調べて送ってくださった。染織史家カーリー・カープ氏の論考⁴は、当時の文献資料を提示しながら、これらの手芸に対してどのような言葉を用い、どのように説明されていたかを明らかにする。それによると、糸とシャトルを使って編上げていく手芸に関しては、17世紀末には、「ノティング」(knotting)という語を使う例がある。ノティングをする女王を称えるオード⁵もある。ノティングは、その名が示すとおり、結び(knot)飾りを編み上げていくもので、それを衣類や家具用ファブリックに縫い付ける装飾に用いたと言われている。

やがて、様々なレース編みも含めて、19世紀頃からは「タティング」という語が使われ出す。カープ氏によれば、この2つの語の間で厳密な使い分けはなされていないと言う。一方で、「タティング」を説明する1800年代の文献掲載図版をみると(図9)、佐藤さんが「タティング」として修得した編み方と一致している。おそらく、19世紀に「タティング」として広がった手芸が、日本にも普及したと思われる。一方、日本で「ノティング」と言うと、小規模な織機を用いた手織りの名称として使われているようである。以上のことから、18世紀の肖像画に描かれている手芸は、今日の日本でいう「タティング」に近いものであると言ってよいであろう(以下、本稿では、この手芸については「タティング」という語を用いる

⁴ Cary Karp, “Knotting and Tatting: The Dual Role of the Shuttle as a Fashion Accessory and Instrument of Decoration,” *The Journal of Dress History*, Volume 5, Issue 2, Early Summer 2021.

⁵ Ibid., p.10.

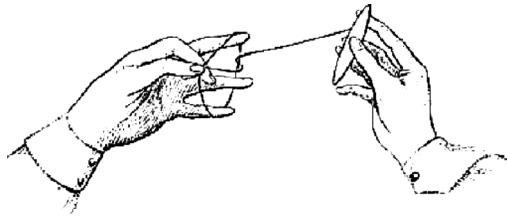


図9 1842年の教本 (*The Lady's Assistant in Knitting, Netting, and Crochet Work*) 掲載の「タティング」の図
 出典：Cary Karp, "Knotting and Tating: The Dual Role of the Shuttle as a Fashion Accessory and Instrument of Decoration," *The Journal of Dress History*, Vol. 5, Issue 2, 2021, p.31.

ことにしたい)。

2. 《ヒル夫妻》にみる18世紀英国文化

2-1. 日常性

糸や道具、そして手芸についての「謎」が解けたところで、改めて絵画全体を見てみよう。すっきりとした室内に二人を配置させ、精緻な人物や衣装、小物等の表現で際立たせ、構図は立像と座像で変化とともにバランスが保たれている。画面に向かって左手前から柔らかな日の光が差し込み、その光により人物が自然に際立つような表現がとられている。室内においても装飾を抑え、落ち着いたある洗練された上流階級の日常の雰囲気をおぼわさせる。こうしたさり気なさが、それまでの王侯貴族の威厳を表すような肖像画と一線を画す、団欒肖像画と呼ばれるものの特質である。

「日常の雰囲気」は、画面上に設定された室内の様子にもよるが、何かの途中、あるいはその動作が直前までなされていたことが描き込まれていることによるであろう。夫人の例を上げれば、「タティング」ということになる。一方、夫について見ると、彼の背後の炉棚の上には、1冊の本があり、あたかも読書中に一時的に置いたように手なりに斜めに描かれてい



図10 図1の部分（筆者撮影） 炉棚の中央より右に書籍が描かれている。

る（図10）。ルネサンス期の活版印刷の確立により出版活動が活性化するも、文庫本もペーパーバックもないこの時代は、限られた層の間で享受でき、所有できるものだった。「タティング」についても、それをするのみならず道具を持つこと自体も一種のステイタスであったが、それらがさり気なく描かれているところが、当時の上流階級の気品ある日常を示すことに繋がっている。実際、夫ジョージは、かなりの学識があり、判例法の並外れた知識で高い評判を得ていた⁶。物品は「ステイタス」や所謂「誇示的消費」を示すものと捉えることができるが、こうしたヒル氏の評判からすると、周りの物品とは、ごく自然な関係性があったとも考えらえるのである。

2-2. インテリア

インテリアに目を向けてみると、人物の背景としてのこれらは、絵画表

⁶ 膨大な知識量で知られる法律家であったが、事件の記憶力に圧倒され、そこから明確な一般原則を引き出すことができず、「迷宮弁護士」（Serjeant Labyrinth）というニックネームが付くほ

現上の理由もあろうが、全体にシンプルな様相を呈している。実際にも、18世紀初頭から英国では、パッラーディオ主義⁷に象徴されるように、古代ギリシア・ローマを源泉とした簡潔な造形が流行している。絵画の左手前にははっきりと描かれている腰長押の線型は、人物の背後へと続くが、古代建築のそれを踏襲している。暖炉の炉柵下のデザインも同様である。

こうした幾何学的な様相が簡潔な印象を与えるが、しかし、細部には、後に「ロココの時代」と呼ばれるようになる18世紀半ばの典型的な装飾デザインが見られる。額縁や暖炉の縁取りに植物のモチーフをアレンジし、軽やかな曲線表現の装飾レリーフがあるように描かれている。緩やかで軽やかなS字曲線に「ロココ」(rococo)の語の由来となる小石や貝殻型の装飾がちりばめられた「ロカイユ」文様(rocaille)を作り上げている。

この緩やかな曲線は、家具デザインにも見られる。夫婦それぞれに用意された椅子は揃いのものと思われ、夫のそれには脚部が、妻のには背もたれのデザインが見える。脚部は、上部が外側、下部が内側に、そして脚先がまた外側に出たS字の形状のカブリオール・レッグ(cabriole leg)である。18世紀を通して好まれた形状で、足先には、この絵画の椅子やテーブルのように、鉤爪のある動物の足型(paw foot)もあれば、鳥の鉤爪がボールをつかんだような足(claw-and-ball foot)も典型として挙げられる。また、椅子の背柱のほか、壺型の背板も緩やかな曲線を形成している。この壺型背板(urn shape splat)は、18世紀初頭、特に、アン女王の時代(1702-14)によく見られ、上述の脚のデザインとともに、後に「クイーン・アン・チェア」とも呼ばれるほどのこの時代を象徴するデザインである。この壺の形状は、テーブルの脚にも見られる。

どであったと言う(*Dictionary of National Biography*, 1885-1900)。リンカーン法曹院のメンバーであり、同院には、ヒル氏のマニュスクリプトが保管されている(<https://archives.lincolnsinn.org.uk/documents/39>)。

⁷ イタリア・ルネサンス期の建築家パッラーディオ(Andrea Palladio, 1508-1580)の古典建築の解釈にならおうとする18世紀英国の建築上の立場で、英国のイニゴ・ジョーンズ(Inigo Jones, 1573-1652)の思想と建築がその初期のものとして挙げられる。

実際の壺も、暖炉の炉床に置かれている（図 10 右下）。おそらく炉に火を入れることのない夏季なのであろう。東洋陶磁器は 17～18 世紀初頭にかけてはヨーロッパで特に珍重されていた。18 世紀中葉から末にかけては、英国においてそれを模したものが製造され、中国趣味の時代を形成し、ロココ時代の特質の一つとなる。炉床の壺は梅瓶型で蓋には精巧な獅子像も見られ、青磁のような繊細な色合いも表されている。このようなスケールでありながら、細やかな像や色彩表現を持つものは、この時代の英国産のものには見られないことから、ヒル夫妻は、本場の品を所有していたと考えられる。

東洋趣味はテーブル上の茶道具にも見られる。青花（日本でいう染付）もしくはそれを模したカップ&ソーサーや宜興紫砂茶壺⁸を思わせる朱泥のティーポットが描かれている。クリームジャグ等は銀製であるが、18 世紀の上層階級の茶事では、銀器と東洋（風）の陶磁器との組み合わせが見られる⁹。素材は異なるも、焼物の植物の文様と、クリームジャグの S 字の脚や渦形装飾は、前述の室内のロカイユ文様と呼応している。

このように厳格な古典的要素と、軽やかなロカイユ装飾が典雅な室内の雰囲気を表しており、特に後者と呼応するかのよう中国趣味がさり気なく加えられている。この時代に発展したカントリー・ハウスの代表例ストウ（Stowe House）¹⁰ やクレイドン・ハウス（Claydon House）¹¹ もまさにこの様相を呈している。

こうした特質の組み合わせは、この絵画のなかの「絵画」にも見られる（図 11）。遠景の廃墟等の古代風のモチーフ、左右非対称に配された樹木、手前に小さく描かれた人物像があり、これらの要素は、クロード・ロ

⁸ 中国江蘇省宜興では、紫砂という均質緻密で、鉄分を多く含む土で、茶褐色の陶器を産出し、その茶壺（ティーポット）は、茶人の間でも珍重された。

⁹ 『紅茶とヨーロッパ陶磁の流れ』（名古屋ボストン美術館、2001 年）。同展では、この組み合わせのテーブル・セットが再現展示された。

¹⁰ 18 世紀コブハム家の時代に加えられた部分が今日の中心を成している。古典主義を代表する

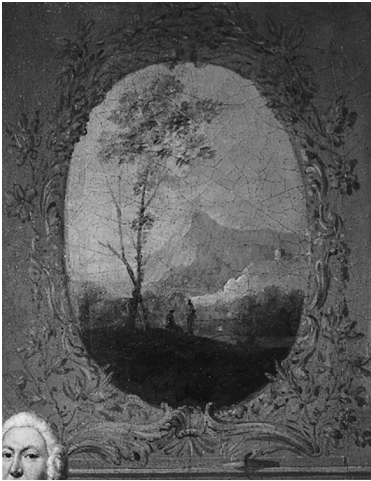


図11 図1の部分(筆者撮影)

ラン (Claude Lorraine, c. 1604–82) 等が描くような絵画を思わせる。ロランはフランス生まれであるが、ローマを拠点とした画家である。美術アカデミーが評価する「歴史画」を壮大かつ深遠な風景の中に表し、その人気から「風景画」の地位を高めた¹²と言われる人物である。英国人にとっては、17世紀から盛んになる「グランド・ツアー」(the grand tour)でその世界と流行に触れることになる。上流階級の子弟が教育の仕上げとして出かけたのは、芸術の中心フランスやイタリアであった。以降、こうした絵を鑑賞できること、あるいは所有することが貴族としての嗜みの一つとも

ロバート・アダム (Robert Adam, 1728–1792) 等がこの時代の建築やインテリアデザインを手がけた。現在はナショナル・トラストにより管理されている (所在地: Buckingham, Buckinghamshire, England)。

¹¹ 1620年以來ヴェルニー家の邸宅であり、その殆どは18世紀のものである。この時代に、近隣のストウのマナーハウスに匹敵するような拡充が行われた。現在はナショナル・トラストにより管理されている (所在地: Aylesbury Vale, Buckinghamshire, England)。

¹² 美術アカデミーにおけるジャンルの階層については、拙著 (『絵画と空間—バーン=ジョーンズの《黄金の階段》とグロヴナー・ギャラリーをめぐって』『人文社会科学論叢』第28号, 2019年, pp.25–45) で論じた。

なる。さらには、それがあのピクチャレスク美学や風景式庭園のモデルともなるのである。ヒル氏の実際の住まいや庭については調査は及んでいないが、前掲のストウの庭は、風景式庭園を確立させたブリッジマン（Charles Bridgeman, 1690–1738）からケント（William Kent, c. 1685–1748）、ブラウン（Lancelot Brown, c. 1715–1783）へと引き継がれ、英国庭園の代表例として今日まで目にすることができる。英国の18世紀美学および庭園文化の源泉である要素が、ヒル夫妻の一室もあるのである。

2-3. 服飾と人物の所作

ヒル夫妻の服飾に着目すると、夫は、広い折返しカフスのついたコート（coat）、ウエストコート（waistcoat）、ブリーチーズ（breeches）の3点を身に付け、髪型はサイドにいくつかのロールを巻き、後部でテイルを結ぶウィッグ¹³、脚はストッキングをブリーチーズに重ね、バックルのついた靴を履く。それと呼応するかのように、ブリーチーズ裾に縫い付けたバンド¹⁴のバックルがあり、その一部が夫の左脚に見える。

夫人は、胴部をステイズ¹⁵で固定し、薄手のネッカチーフ状の布地が、首と肩を覆っている。この胸襟当ては、夫人のように胴着の中に入れ込む（=tuck：裾、襟、端等押し込む）ことが多かったようである。そのためタッカー（tucker）とも呼ばれていた。スカートは横に広がって見えるが、ペティコートを履く前に、パニエ（pannier / hip pad）と呼ばれる腰枠を入れるのが一般的で、さらには張り骨（hoop）を入れ、幅を広げるのがこの時代に好まれた。フォーマルな場では、さらに横に広い扁平な形のものも着用され、幅が限られるドア等では、横向きに歩く必要があったことはよ

¹³ 小麦粉等をかけ、白もしくはグレイにした。ヒル氏の襟には、白粉も描かれているように見える。同様の肖像画が、散見される。

¹⁴ ニー・バンド（knee band）と呼ばれ、同時代の資料には刺繍等の装飾が施されたものも多数みられる。

¹⁵ stays：所謂コルセットのような胴着。固くしたリネンの布に、鯨の髭を縫い込んでつくる。前部には飾りに施された逆三角形のパネルであるストマッカー（stomacher）をつける場合もある。



図12 ペティコート(右)とマンチュア(左),
サテン, 1760年代
こうしたギャザーやプリーツ状の襷飾りは
フラウンス(flounce)と呼ばれる。出典：
A. Ribeiro, *A Portrait of Fashion*, National
Portrait Gallery, London, 2015, p.39.

く聞くエピソードである。

その上に「マンチュア」(mantua)と呼ばれる裾の長い前開きのガウンを羽織る。ガウンと言っても、この絵のように胴部は身体のラインに沿った形である。袖は肘までの長さで、カフスにラッフルの飾りをつけている。カフスにはプリーツをつけ、ボリュームとともにマンチュアの胴部の縁飾りと呼応させている。同じような襷装飾が現存例の中に確認できる(図12)。

スカートの部分には、薄手の布地のエプロンが見られる。これは夫人が茶事や裁縫等の作業をするためではなく、衣類の装飾として当時流行していたものである。恐らく絹織物であろう。刺繍による文様と縁飾りが施されている。

頭部のデイ・キャップは、当時あらゆる層でつけられていたと言われていたが¹⁶、夫人のような繊細なレースのキャップや中央でつまみ上げたよ

¹⁶ リバプール国立博物館 (National Museums, Liverpool) は、18世紀服飾の再現とともに、その着方を解説する動画を作成し公開している。

うな襷 (pinch pleats) は、富裕層のそれによく見られるものであった¹⁷。

夫妻の服装は、18世紀初頭からのスタイルを踏襲しているが、その時代にみられるような紋織や刺繍等の壮麗な文様表現はなく、それぞれ単色で構成されている。またその淡い色彩も、前述のような古典主義的な趣味を反映しているものと考えられる¹⁸。簡潔ながらも男性のウエストコートと女性のスカートはサテンの絹織物を思わせるような光沢を持ち、テキスタイルの質の高さを暗示している。ウエストコートやポケット・フラップの縁飾りは、更なる光沢ある表現で描かれている。金糸の縫取が、夫のウエストコートに施されいたものと考えられる。ボタンやボタンホールにも金糸による手の込んだ装飾が見られる¹⁹。

こうした光沢に対して、それぞれを部分的に覆う、女性のエプロン、男性のコート等のウールやフェルトを思わせる黒や濃紺色のマットな風合いが抑制となりつつも、光沢のある色を引き立ててもいる。その色が、男性のクリームゴールド、女性の青味かかったペイル・ホワイトの柔らかで輝きのある色のコントラストにもなっている。共布であろうか、夫のウエストコートと妻のレティキュールの袋の色彩が、コーディネートされているかのようである。また、袋の引き紐のリボンは、妻の胸部やキャップのリボンと色を合わせ、ペイル・ホワイトのドレスのアクセントとなっている。

端正なデザインの中に、薄手の男性のブラウスや袖先の襷、女性のスカートやラッフルレースが柔らかさを演出している。これらの縁飾りのスカロップ形もまた、室内のロカイユ装飾等の軽やかな表現と重なり合う特質を有し、ロココの時代の特徴が表れている。

¹⁷ A. Ribeiro, *A Portrait of Fashion*, National Portrait Gallery, London, 2015, p.133.

¹⁸ パステル調とも言える淡い色彩は、アダム父子 (William, 1689–1748; Robert, 1728–1792; James, 1732–1794) によって確立されたアダム・スタイル等の建築内装やウエッジウッドのジャスパール・ウエア等の典型ともなっている。

¹⁹ 房やボタンには、パスマントリー (passementerie) と呼ばれる珠飾りの技法が用いられた。こうした細部装飾は、次の図書に詳しい。Hart & S. North, *Historical Fashion in Detail: The 17th and 18th Centuries*, V&A Publications, 1998.

女性の所作については、「タティング」を通して見てきた通りであるが、男性はどうであろう。夫は、ウエストコートに手を入れ、片方の足に重心をおき、さり気なくこちらを向いたポーズのようにも見える。しかしながら、これは当時の「教本」に基づくものであると言う²⁰。その教本フランソワ・ニヴロンの『上品な振る舞いの初歩』(1737年)²¹は、今日復刻版を手にすることができる。その全頁をあたってみると、肖像画と類似するポーズが見られ(図13)、その説明には、「両腕は脇が少し開くくらいゆったりさせ²²(中略)右手をウエストコートの中に入れる。(中略)重心は右足にかけ、左足を前方に出し、その足先を外側に向ける」とある。肖像画のポーズと合致し、夫のポーズはこの時代の「上品な振る舞い」ということになる。

今日の我々には、肖像画と言え、人物を前にして描くというイメージがあるが、実物を前にした写生というのは近代以降確立してくるスタイルである。デヴィスは、細密画家として長く訓練を受けてきたために、生きたモデルから描くことに不安を感じていたと言われている。そのためスタジオにある小さな木製のマネキン(人体模型)を頼りに、必要に応じてミニチュアの衣装を着せて、描いていたと言う²³。そうであるとすれば、当時の典型的なポーズをとり入れた可能性は否定できないであろう。「タティング」や「上品な振る舞い」も含めて考えれば、夫妻の絵画上の所作は「定式」がもとになっている可能性は否めない。とはいえ、画家は夫妻を訪問しては取材をしたことであろう。その中で自然にとったポーズや仕草が画家のイメージの中で再構成されている可能性もある。しかし、その「自然

²⁰ Trumble, *ibid.*

²¹ François Nivelon, *The Rudiments of Genteel Behavior*, 1737.

²² 左の脇に三角帽(tricorn hat)は、この時代の「最高のおしゃれ」と言われ、鬘が大きくなるについて、脇に抱えられるようになった(『FASHION 服飾大図鑑』河出書房新社2013, p.151)。「教本」にも「左の脇に入れる」とある。

²³ Trumble, *ibid.*



図 13 『上品な振る舞いの初歩』掲載図版
“standing” (plate 2)

出典：F. Nivelon, *The Rudiments of Genteel Behavior*, 1737.

な」ポーズでさえも、今日の我々が意識・無意識的にも、カメラの前で瞬時に記号を選んでポーズをとるように、18 世紀の社会的要請に促された所作であると言えるのではないだろうか。

おわりに

本学のこれまでの授業では、美術書掲載図版の《ヒル夫妻》を教材として、18 世紀英国文化を紹介してきた。この度、その実物の所蔵先 YCBA での実見調査で、図版では気づかなかった「糸」が描かれていることが視認できた。それにより、これまで「砂糖挟み」と思われていた夫人の持物が、手芸の道具であると訂正でき、さらに、本学英文学科生の情報により、それが今日でいう「タティング」の道具であることも特定できた。その情報を提供してくれた佐藤美紅さん、そして、2 度にわたる実見の機会を設けてくれたランフィア学芸員、調査に立ち会い、多くの助言をくださったチャ

ン教授には、記して感謝の意を表したい。この謎が解けたことで、本作を通しての18世紀英国文化の世界がさらに広がることになり、描かれているモチーフは、その典型とも言える要素であることも再確認できた。

この作品が描かれた英国18世紀中葉は、所謂「第一帝国（第一次植民地帝国）」の完成期に向かう時期にあたる。1600年に東インド会社の設立以降展開した動きは、18世紀に新大陸、アフリカ、インドに及ぶ植民地支配となって完成する。そして、重商主義政策のもとで資本が蓄えられていく。《ヒル夫妻》の画面上の物品と、こうした歴史とを重ねて読むことができる。また英国内では、17世紀の政体の変化とともに政党政治・議会政治が形成され、18世紀には慣行となり、それが今日の基盤となっている。その同時代人でトーリー党の弁護士であったジョージ・ヒル氏の暮らしとしても、本作を見ることが出来る。「トーリー党」、「法廷弁護士」さらに記録を調べると「判例法の並外れた知識の持ち主」であり、「かなりの学識と業績を持つ数学者であった」ことから、絵画の中の物品の単なる所有以上の意味も見出せるであろう。

本作の美術史的考察については、稿を改めることにするが、デヴィスの肖像画家としての人物描写に加え、細密画家としての経験が、周囲のモチーフの緻密かつ特徴を捉えた描写を生み出しており、モノを特定することを可能にさせている。「糸」もその一つである。そこからさらに世界が様々に繋がっていくのである。その向こうを奥深く探ることができる入口を、英文化を学ぶ我々に与えてもいるのである。